

なぜ組織的に取り組まなければいけないの？ 一人一人が頑張るだけではダメなの？



子どもたちの
笑顔・元気のために

R 5 年度 第 3 号
津山教育事務所 6 月

A P 訪問も折り返しを迎えました。今年の訪問で感じられることの一つに、面談・協議の場に主任の方、担当の方の参加が増えてきているということです。学校の中心で活躍されている先生方、特に若い方の考え方や感じ方に教えられたり、感心させられたりする場面も多くあります。校長先生が、A P の実現に向けて組織で動こうとされていることを感じます。

今回の「一步先へ」は、【組織的に動く】ということを考えてみたいと思います。そもそも、「なぜ組織的に動かなければならないのでしょうか？」「一人一人が頑張るだけでは、なぜダメなのでしょう？」

学校という組織は、実践が各担任・各担当任せになりがちな組織です。確かに、教育活動は教職員が「裁量」を働かさざるをえない場面が多くあります。具体的な場面において教職員の「判断」や「工夫」が不可欠だからです。それだからこそ尚更、【指導観】や【児童・生徒観】【取組の方向性】を揃えておかなければ指導の効果は上がっていきません。その上で、一人一人の「工夫」や「裁量」が必要になってきます。「**指導の方向性に従わない教職員**」「**言われたことだけ行う教職員**」は、どちらも **ダメ** です。子ども達の成長には「**考え合い、探求し合う教職員集団の育成**」が不可欠です。人材育成も A P の重要な柱です。

組織的に取り組むための1例 → 「実践交流会」を校内研修に計画的に位置づける



「実践交流会」は A P の取組の確認や交流を校内研修と連動させるための組織です。実効性を高めるためには、定期的に状況を確認し、取組を揃えなおす作業がどうしても必要となってきます。具体的な内容は右の①～④が考えられます。特に①は、A P の取組だけでなく教育活動全てにおいての土台となりますから、年度当初には必ずしておきたい事柄です。校内研修（会議）に「実践交流会」を計画表に位置付けて行うことが取組の共有や組織的な行動につながっていきます。

- 「実践交流会」では
- ①指導観や児童・生徒観を揃える
 - ②A P の取組の考え方・方向性を共有
 - ③取組を確認・交流
 - ④取組の改善

